



それでは実際の症例は？

入院した小児肺炎63例のまとめ

—東京医療センター小児科—

- 男児 47例 女児 16例
- 年齢 0~14歳 (平均5.9歳)
- WBC 2,900~16,400 (平均7,000)
- CRP 0.1~10.9 mg/dl (平均1.80 mg/dl)
- 酸素需要 24例 (38.1%)
- ステロイドホルモン投与 8例 (12.7%)

ほとんどは
気管支喘息の症例

2

症例2 10歳 男児

2009/9/20夜に39°Cの発熱、咳嗽・喘鳴が出現し、当院救急外来を受診。発熱及び気管支喘息小発作として吸入を施行し喘鳴は改善した。インフルエンザと診断し、ザナミビル吸入(保護者の希望により)を処方した。9/21も発熱は続き、喘鳴が増強したため救急外来再診した。呼吸困難あり、吸入しても改善しないため入院となった。

既往歴及び身体所見

既往歴:

幼小から気管支喘息(7月から当院で治療開始、過去に入院歴なし)、アトピー性皮膚炎。

身体所見:

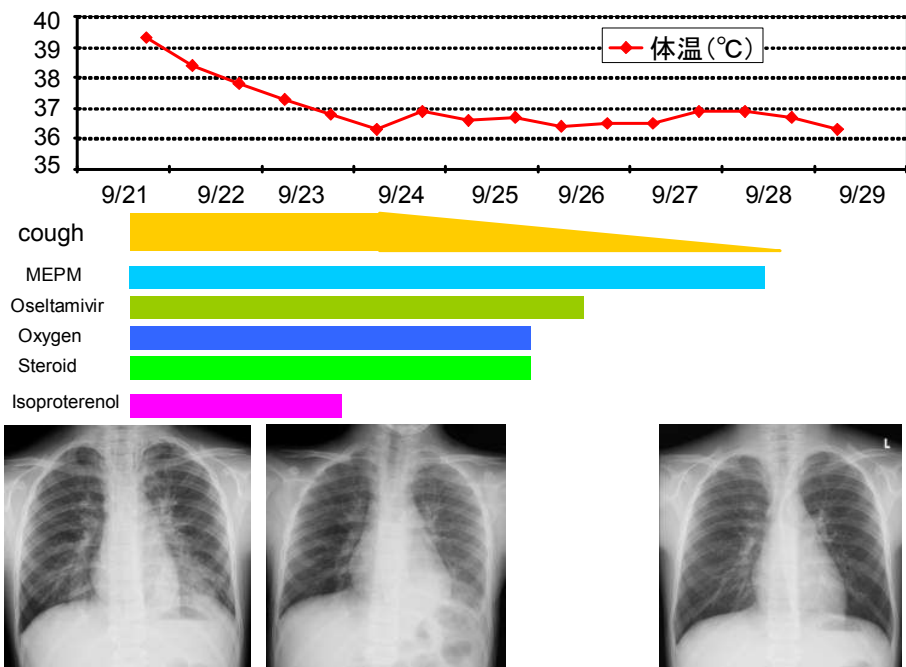
体温39.7°C、心拍数150回/分

呼吸数38回/分、血圧114/52mmHg

意識清明、SpO₂ 90% (room air)

胸部所見: 聴診にて右有意に両側性の呼吸音の減弱あり。ラ音・喘鳴は聴取しない。

症例2 入院経過



症例3 7歳 男児

2009/10/2、朝から咳嗽出現、午後から全身倦怠感を自覚し、17時には39°C台の発熱が出現した。

10/3も発熱、咳嗽あり、呼吸困難を訴えたため、午前中にかかりつけの近医を受診した。インフルエンザ迅速検査は陰性。SpO₂ 80%前後のため吸入を実施したが、呼吸困難改善せず、SpO₂も80%台から上昇がみられないので当院へ救急搬送された。初診時インフルエンザ迅速検査陽性。

既往歴及び身体所見

既往歴:

アトピー性皮膚炎。今までに気管支喘息を指摘されたことはない。

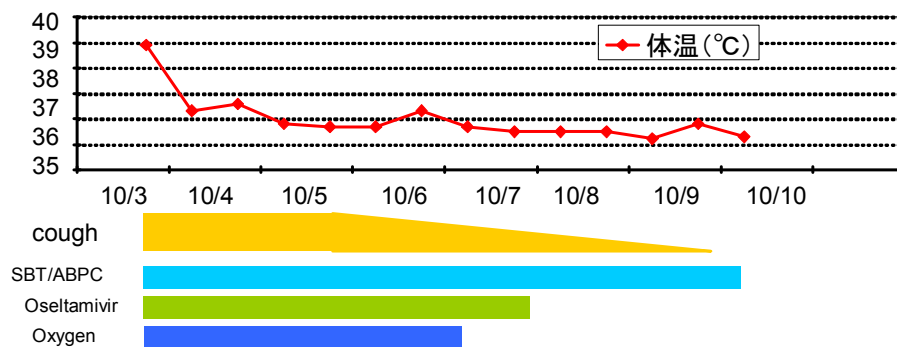
身体所見:

体温 39.4°C、心拍数 146回/分、
呼吸数 36回/分、SpO₂ 95% (O₂ 3L/分)

意識清明、チアノーゼなし

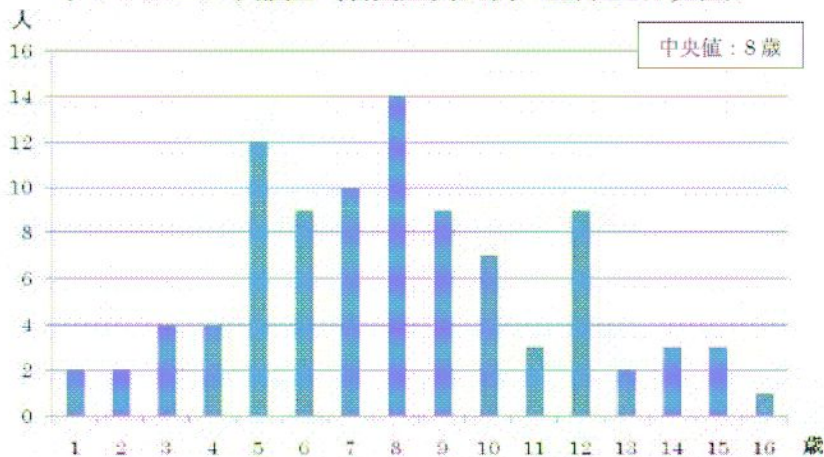
胸部 聴診にて右下肺の湿性ラ音を聴取するが、喘鳴はない。

症例3 入院経過



新型インフルエンザA(H1N1)による 脳症の年齢分布(n=94)

インフルエンザ脳症 (届出症例94例 12月24日現在)

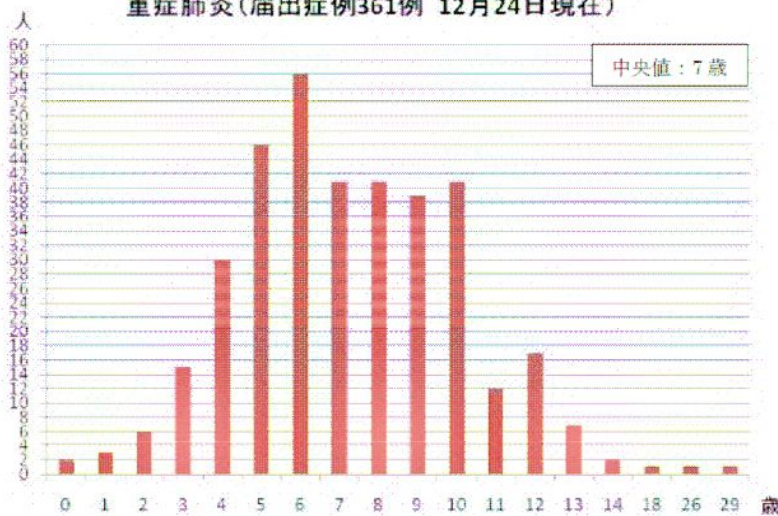


日本小児科学会新型インフルエンザ対策室

http://www.jpeds.or.jp/influenza/influenza_091224.pdf

新型インフルエンザA(H1N1)による小児重症肺炎 の年齢分布(n=361)

重症肺炎 (届出症例361例 12月24日現在)



日本小児科学会新型インフルエンザ対策室

http://www.jpeds.or.jp/influenza/influenza_091224.pdf

新型インフルエンザA(H1N1) 国内では…

- 若年者(小児)に多い
- 急激に発症するウイルス性と思われる肺炎がある(喘息の小児)
- 肺炎球菌による二次性肺炎もありうる
- 脳症・心筋炎の問題
- これまでのところ死亡例は少ない

11

国外の状況

12

米国における年齢別 新型インフルエンザ(A/H1N1)感染症例数

- 季節性インフルエンザ(2007/2008、n=3930)
高齢者に多く、**0-17歳が22%**
- 新型インフルエンザ(4/15-6/30、2009、
n=312)
若年者に多く、**0-17歳が56%**

(WHO、CDC、Am J Hygiene)

ニューヨーク市の概況

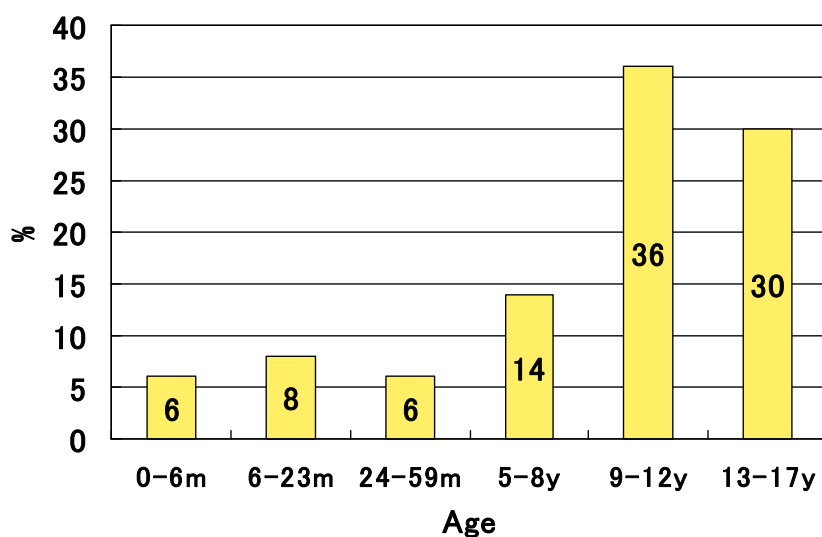
- 2009年5月～7月8日までに909名が入院
- 年齢分布は4歳未満が208例(22.8%)、5～24歳が278例(30.6%)、25～65歳は379例(41.7%)、66歳以上は44例(4.8%)
- 通常季節性インフルエンザに比し高齢者とその重症化例は少ない
- 909例中225例(24.8%)がICUに入室し、内124例(13.6%)がレスピレーター管理、45例(5.0%)が死亡
- 患者の75%に基礎疾患が認められ、喘息と慢性呼吸器疾患が合わせて41%と多く、以下、心疾患、糖尿病等
- 一方で、大きな危険因子のない例も20%以上みられた

米国の小児におけるFlu A/H1N1 感染症による死亡例の検討

- 2009年4～8月に477例が死亡
- 小児は、36/477(7.5%)
—7/36(19%)が5歳以下

MMWR September 4, 2009, 58: 941-947

米国の小児におけるFlu A/H1N1感染症 による死亡例の検討(年齢分布:n=36)



MMWR September 4, 2009, 58: 941-947

米国の小児におけるFlu A/H1N1 感染症による死亡例の検討

- 2009年4～8月に477例が死亡
- 小児は、36/477(7.5%)
 - 7/36(19%)が5歳以下
 - 24/36(67%)が基礎疾患のある患者
 - 22/24(92%)が神経発達遅滞
 - 19/36(52%)に抗インフルエンザ薬が処方
 - 4/36(13%)が発症後48時間以内に投与開始
 - 10/23(43%)に細菌感染症の合併

MMWR September 4, 2009, 58: 941-947

米国の妊婦における Flu A/H1N1感染症

- 4/15/2009～5/18/2009
- 罹患した妊婦のうち11/34(32%)が入院
- 妊婦の入院率は一般の人口に比べて4.2倍高い
(0.32/100,000 vs. 0.076/100,000)
- 6人の死亡(肺炎、ARDS)
- 妊婦は、合併症のリスクが高い可能性あり

Jamieson DJ, Lancet 2009, 374(9688):451-8

新型インフルエンザA(H1N1)での剖検例77例に おける肺組織の細菌感染に関する検討 - 2009年5-8月、米国 -

- rRT-PCRにより確定診断された剖検例77例
- 生後2ヶ月～56歳
15歳以下 7例、20～30歳代 6例、40～50歳代 9例
- 77例中22例(29%)の肺組織で細菌感染が証明された
肺炎球菌 10例 A群溶血レンサ球菌 6例 MRSA 5例
- 検討できた17例の入院後死亡までの期間は平均6日間
(1～25日間)
- 22例中18例は経過中医療機関に受診しており、18例中
8例(44%)は入院

MMWR Morb Mortal Wkly Rep. 2009 Oct 2;58(38):1071-4

新型インフルエンザA(H1N1) 外国の報告では・・・

- 若年者に多い
- 季節性よりやや高い死亡率(0.1～0.5%)
- 妊婦、糖尿病、腎疾患、免疫不全などの
基礎疾患で重症化しやすい
- でも危険因子なしでも重症化あり
- 二次性の肺炎球菌感染症が多い

